

- I. 日時：平成 21 年 7 月 30 日(金) 午前 11 時から午後 1 時まで
- II. 場所：私立大学情報教育協会事務局会議室
- III. 出席者：大塚委員長、岩井副委員長、安田委員、大野委員、佐藤修
井端事務局長、森下、恩田
- IV. 検討事項

(事務局長) 現状と今後の計画

1. 今後の計画

本委員会は 1 回目、他委員会に比べて作業が遅れている。

分野別学士力については日本学術会議に付託する(参考 1)。来年 5 月には全て開示されるので、年度内に意見整理がなされる。私情協は、文部省を通じて 12 月には纏めを提出する。8 月 8 日に北原先生に理事長・学長会議にて審議経過を報告して頂く予定である。できれば日本学術会議と協力関係を持ちながら学士力制定に協力したい。私情協は 11 月総会に向けて答えを出す。最低限度 10 月末には私情協各分野の意見を纏めなければならない。10 月末迄に詳細化する。基礎能力を整理(因数分解を整理)して、コアカリキュラムイメージ(到達能力、詳細な学習行動目標)を示し、測定の方法についても検討する。

今日の目標は、経営学教育学士力(案)を分解して、コアカリキュラムイメージを示して、具体的な到達目標を書き出す。

2. 日本学術会議との調整

日本学術会議の検討は 3 つの分科会で進んでいる。そこでは質保証の枠組みを考えるために、英国の質保証の枠組みを視野に入れながら、日本の質保証を整理しようとしている。英国 QAA では知識・技能の内容、教授法、教育水準の 3 つの視点で質保証を検討している。英国教員のネットワークで質保証を毎年見直しているが、最新版(資料)は 2007 年版である。日本学術会議はこれを素材に纏めてくるので、我々もこれを考慮する。

日本学術会議は 8 月から分野別質保証検討の 10~15 グループで検討しているがその内容は不明である。8 月 8 日にはこれについても説明していただく。

日本学術会議は例えば心理学については認定心理士の職能資格試験が学士として出てきた。しかし学士教育目標としては不適切である。大学教育の医学・薬学・歯学については、職業人の育成なので、文部科学省は委員会を作らないとした。我々も関与しない。それ以外については大学教育の意見を作りたい。

3. JABEE

理工系では JABEE が大学教育について企業の意見を入れながら教育信頼性の基準を作っている。JABEE はグローバル標準を視点としている。分野によっては一般と専門の二つのレベルを考えている。文系もグローバル標準を視野に入れて考えてほしい。現在の課題は最低限レベルを検討しているが、できれば専門レベルも検討したい。

(岩井副委員長) 経営学教育の学士力案の説明

最初は意見が色々あった。ここでは経営学教育に限定して意見を出しあった。学士力一番は経営における組織の仕組みを教えるべきということで、組織と経営資源について作成した。学士力二番は理論と現実について考察した。理論をしっかり教えるだけでなく現実についても説明する。両方の橋渡しができるように教えたいということで記述した。学士力三番は学生が卒業して組織に入った時に使える人材として問題解決能力を与えなければいけないと考え、その重要性を認識させるために作成した。最後の四番は企業倫理・社会的責任・人権・法的問題等を認識させるために作成した。企業に限定せず、組織一般を対象とする。

質問

(委員長) 経営資源には人・もの・カネ・情報がある。

(岩井副委員長) 「現象を理解できる」とは経営や組織の構造を理解できることである。

(安田委員) 最初の原案が B4 資料で、これを検討して 4 案になった。

(岩井副委員長) 最初の原案の簡単な説明。

(事務局長) 理論だけを扱うのは無意味である。実践とのマッチングが重要である。世界に通じる教育水準を考えるべきである。経営学の理解は観念的なものではなく、現実的な理解が必要である。原案への反応は回答者によって温度差がある。回答には良い意見があるので、中間報告で纏めたものについて更に深掘して纏めてほしい。必要なら原案を修正しても構わない。

(委員長) 詳細な学士力は各原案項目について具体的に示す。

(事務局長) 全体的な仕組みとはどういうことか、何を学ばせる必要があるのか、基礎的な能力とは何か等を検討してほしい。

宿題のコアカリキュラムについての報告

(岩井副委員長、資料④)。私は MBA 担当であるが、米国の認証(AACSB)を受けるためにカリキュラムについて学内で検討してきた。Mission statement が学士力に相当する。高度職業人育成のために何を教えるべきか、から逆にカリキュラムを作成した。欧米のプログラムに準拠するようにカリキュラム構造を考えた。必修科目は 100 番台。専門科目 300 番台は分野で分けている。必修科目が今回のコアカリキュラムに対応する。MBA ではあるが学部と科目の中身は変わらない。必修科目は 10 ある。1 年生のうちに履修する。2 年生以降に 300 番台科目を履修する。これは専攻による選択科目である。500 番台はプロジェクト・グループワーク中心科目である。これらをやって卒業。修士論文がない。測定は各教員の科目内で行っている。単位数に満たないと卒業できない。米国 MBA をモデルにカリキュラムを作成した。標準的な MBA カリキュラムと思う。

(質問、委員長) 具体的な科目名は書かない。各項目を理解するためにコアカリではどこまで考えるかを書く。

(大野委員、資料③) 学生指導で感じることを元に考えた。社会が求める人材になるために、常識的な能力を身につけてほしいと考えて、前回資料 3 を参考に、学士力案を具体化・整理することを考えた。A は知識(専門用語など)を学ぶ、B は応用力、(A を含む) C と D はトータルとしての学士力である。A が学士力 1 と 4 に、BCD は 2 と 3 に対応する。前回資料 8 を参考に、A でまずは基本的な理論を勉強させる。それと実務との関係を学ばせる。次に BCD に含まれる 5 項目を考えた。しかし具体的な科目との対応はまだ考えていない。能力判定は A については知識を問うテスト、BCD についてはレポートなどを使う。これを更に深く掘り下げるのかと思う。

(佐藤修、資料①) 科目名は弊学のコアカリキュラムである。教育内容は「説明とキーワード」にある。学生はキーワードが分かれば良い。科目名を出さないのが、今日の課題の答えにはそのまま使えないが、測定を考える場合には使えると思う。これらの理解度を問うのは測定である。今日のテーマについては英国の資料が使えるようである。資料は学部と大学院を含むが、レベルを学部に限定すれば使えると思う。

(安田委員、資料なし) 昨日学内で議論した。学士力の 4 項目はどの大学でも目指していることである。衣川先生が学士力として教養を身に付けることを強調されていた。経営学の勉強を通じて大学生の教養を身に付け、これを学士力とすれば良い、というのが本学の支配的意見である。4 年間で教養を身に付けさせるカリキュラムを考えている。従来のように 1 年 2 年で基礎的科目、3 年 4 年で専門科目と言う科目配置でなくて、もっと教養科目を 4 年間に散りばめることを考えている。現在の各大学のカリキュラムを充実させていけば学士力を実現できるのではないかと。学士力測定では、全国的統一試験実施は難しい。現実的には各大学の評価システムによるもので測定と質保証をするしかないと思う。任意に使えるような資格試験も利用可能かもしれない。

(委員長、資料②) 学士力とコアカリキュラムの間に詳細設計が必要である。詳細設計の例示として科目群を示す。学士力詳細化では、青山学院大学の科目群分野ごとに前振り文章を書き、市場やグローバル化など不足部分を補えば良いかもしれない。経営学部に対す

る需要を示すために公認会計士試験の経営学部分と経営学検定試験を紹介した。学士力測定については各大学で個別的能力判定試験を実施する他に、地域の大学間連携で相対的な評価を行う共通試験を行う。単位互換認定にも関わる。

(岩井副委員長、福原委員資料⑤紹介) 年次による段階的教育の視点を考慮する必要がある。長期インターンシップ、外部評価も加える。現在は科目が細分化しており、経営全体や経営資源の仕組みがわからないのが問題ではないか。各科目単位では勉強するが、経営の全体像を分からないまま卒業している懸念がある。昨年度までのビジネスゲームも、経営の全体像を示すのに有効である。経営の「リアリティの感得」が学士力1番の意図である。

(質問、委員長) 事例中心の科目群の例は、京都産業大学のプロジェクトXを使った事例教育などで、最初に仕事のイメージを持たせるために設置している。

(事務局) 授業は言葉の定義を教えることから始めるが、これよりも経営の全体像を感覚的に理解させることが重要である。学士力1番が最も重要で、これをどのように書くかが大切である。佐々木先生は職業と学問とのかかわりを示すためにプロジェクトXを講義に使ったが、これでキャリアアップのために教養として身に付けさせる(専門教養)ことを狙っている。測定も大学だけでなく産業界を入れて測定すべきである。知識の暗記科目では測定しても意味がないので、社会と言う物差しを入れて、学生も教員も社会の現実の厳しさの中で到達度を測定できる物差しを導入すべきである。日本の25歳以上の学習者比率は国際的に低い。教員の教育力がないのが、社会の評価が低い理由ではないか。教員の使命感が不足しているのではないか。経営の学士力はグローバル標準に対応したものを必要とする必要がある。学生の評価だけでなく教員の教育力を評価するためにも測定の物差しを作る必要がある。社会の風を入れる測定指標を作してほしい。

学士力の詳細化方針

(委員長) 学士力の2番、3番、4番の切り分けをどうするか。3番4番についてはゼミの他、様々な分野の教育で実現するという書き方をする。

(岩井副委員長) 学士力4番を科目とするか測定対象とするかについても議論する。青山学院大学ではキリスト教教育の先生を中心に、経営倫理教育を必修として実施している。倫理・環境・社会的責任など幅広く考える必要がある。

(事務局) 学士力4番はケーススタディなどでも学べるのではないか。企業の役割は業務活動を通じて、人類の福祉に貢献することである。企業理念の中でこれを実現することが企業倫理である。ケーススタディからシナリオを作り、学生に議論・発言させて理解の度合いを測る。この学士力の4番も大事な課題である。

(佐藤修) 学士力の4番は英語QAA資料の3.5に近い。学士力の1番は3.1に近いので、参考になるのでは。

(委員長) 学士力の4番は1年時、3年時などで企業倫理等の科目で扱う。

(岩井副委員長) 学士力の4番は経営教育を通じて行われる人格教育で、学士力の3番までとは違う。学士力の4番は4年間で身に付ける人格教育としての理念的目標と捉える。

(委員長) 学士力の4番は総論としてだけでなく、その他の科目でも学ぶこととして扱う。以上を元に、各人で文章を作成してもらおう。福原委員の資料は参考になる。作成した文章に具体的な科目群を並べて作成できる。

(事務局) 学士力の1番と4番を先に、2番と3番を後に並べ替える。

次回

(事務局) 以上の意識合わせに基づいて詳細化する。8月21日午後3時から次回を実施する。

(委員長) 以上の議論と福原委員の案を参考に、宿題を8月17日までに事務局に送信する。

(文責 佐藤修)